

# Rosa Plumula

ローザ・プルムラ

●茨城大学・大学教育研究開発センター



ニュースレター No23

## 目 次

巻頭言	1
ようこそ！ 「大学教育研究開発センターです」	2
私たち頑張っています - 専門部会だより	3
聞いて欲しい私の意見 - 1年を過ごして	8
Voice - 私にとっての教養教育 -	10
教養教育Now - 教養教育改革 -	
・成績の6段階評価の導入とGPAについて	12
・JABEE対応と教養教育	13
・英語習熟度別クラス構想について	13
教養教育古今東西	15
キャンパス情報	16
掲示板コーナー	19
つぶやき	19

(平成14年4月発行)

新入生の皆さん，入学おめでとう。

自分の人生の時代と，社会の変化過程の時代と，二つの時代を意識してみよう。前者としての大学時代は，それ以前ともそれ以後とも異質の時節であり，その過ごし方が私達の将来に大きな影響力を持つ時期だ。このことを実感するのは卒業後数年が過ぎてからかも知れない。後者としての近未来時代は，国際化や情報化がますます進展し，多様性と変化の時代を捉えられる。そのような卒業後の社会の中で，自分のポジションを確保するために，今なすべきことは何か...広く学び深く考え...既存の枠を越えた発想で，近未来社会に生きる自分を思い描いてみよう。

特に，「自分で」考えることが重要だ。それは，考えた結論に自分が責任を持つことを意味するからだ。自分で選んだ自分の道を進むためなら，あらゆる困難を克服できるだろう。先入観から独立して，自分を知り，変化する先の社会を想定してみよう。進み行く社会を背景に，自分の生き方を考える過程で，新しい自分を発見するかも知れない。

大学時代にしておくべきことは，自分を越えることだ。そのためには，昨日よりも今日，今日よりも明日へと成長を積み重ねることが大切だ。今の自分を越えた皆さんが，卒業後の社会で，他人を幸せに出来る程に幸せになって欲しい。卒業生がそれぞれの時代の中で，澁刺と生き抜いている事を知るのが，私にとって最高の喜びである。

(学長 宮田 武雄)

# 『ようこそ！「大学教育研究開発センター」です』

大学教育研究開発センター長  
曾 我 日出夫

新入生のみなさん，御入学おめでとうございます。

でも本当に「芽出」るかどうかは，これからどうするかにかかっていると思います。大学が高校までと大きく違うところは，自由が一杯あることでしょう。これは薬にも毒にもなります。できるだけ試験のやさしい授業を選び，最低限の努力で卒業することもできるでしょうし，あえて高い目標をたて当初は思いもしなかったものを修得して卒業することもできるでしょう。

さて，大学には「大学教育研究開発センター」というものがあります。この「センター」はどこの学部にも属しておらず，大学全体で運営されています。その仕事は，全学共通的である教養科目の編成や授業に関する全学的な調整です。1年生のみなさんは，教養科目を多くとることになりますので，この「センター」内にある教養教育係とは何度も関わりをもつことになるでしょう。大学生活の案内はいろいろな所から聞くでしょうから，以下では，はじめに述べた「自由」に関連して，2～3のアドバイスを言います。

授業科目の選択は，大学では随分自由度が高いと思います。それで，ぜひ「よくわかった」と言える科目をつくっていくようにしてほしいです。「よくわかる」とは，結果や結論をおぼえるのとは違います。結果や結論が出るに至った過程を再現して納得するということです。つまり，創始者の思いを追体験するようにしてほしいということです。

こんなことにこだわって勉強しようとするすると，随分時間がかかります。そこで，どういうものを中心にするか，よく計画を立ててほしいです。全部の授業を「よくわかる」ようにするのはちょっと無理でしょう。ですから，優先させる科目をいくつか決めて，それについては徹底的に「よくわかる」ようにします。

ところで問題は，こういう科目をどれにすればよいかです。これは，結局はみなさんひとりひとりが決める他ありません。が，とりあえず計画を立ててみて，先生に相談してみることをおすすめします。担任の先生，授業の先生，いろいろ相談してみてください。意外と先生の方も，相談に来てくれることを期得していると思います。先生と気軽に相談できるようになると，科目の選択だけでなく，将来いろいろな収穫があることでしょう。

4年間は長いようですぐ経ってしまいます。しかし，努力して何かを得ようとするすると，かなりのことができる期間でもあります。一生のうちで，大学時代程「自由」があるときはないと思います。これをどう使うかもこれまたみなさんの自由です。4年後「よかったなあ」と思えるような大学生活を造るように努力してほしいです。

# 私たち頑張っています 専門部会だより

外国語科目専門部会長  
永井典子

茨城大学の教養教育で、なぜ外国語を必修科目として学ぶのでしょうか？教養科目として外国語を履修する目的は、2つあります。まず、1つは、外国語をコミュニケーションツールとして獲得することです。そして2つ目は、コミュニケーションツールとして使いこなせるある外国語を媒介として、その言語が使用されている国、地域の文化、思想、政治、経済の知識を深め、異文化間理解を深めることです。

1つ目の目的、即ちコミュニケーションツールとして外国語を獲得することは、急速にIT化が進展する現在社会を生きていく皆さんにとって、避けられない課題です。今では、ネットを使い、あなた方の部屋からアジア、アメリカ、ヨーロッパの大学の授業内容を閲覧したり、刻々と変化する経済情報を入手したりできるのです。そのためには、それらの情報が書かれている外国語（英語、中国語、ドイツ語、フランス語等）が読めなければなりません。また、ただ単に情報を入手するという受身的理由で外国語の獲得が必要ではありません。皆さんが今後専門とする領域で研究した内容、知識をもとに皆さんの考えを世界に向かって発信するためにも、外国語獲得が不可欠の条件です。

2つ目の目的、外国語を通しての異文化間理解も現在のようにグローバル化した社会では、不可欠の要素です。グローバル化に伴い、昨年アメリカで起こったテロ事件のように、異文化間の摩擦も顕著になるでしょう。このような状況に於いて、異文化を深く理解し、それぞれの違いを受容していくことが大切です。異文化を理解するためには、まず、その言語に精通することです。外国語を習得する過程で、その言語が使用されている国、地域の人々の思考法、価値観も習得することができます。そして、さらに、外国語を学ぶことにより、日本人としての考え方を、他言語でのそれと比較検証することによって、日本人としてのアイデンティティ、さらには個人のアイデンティティを明確にすることができます。自己の考え方を客観的に分析できない限り、他の文化を受容することはできないでしょう。

このような2つの目的意識をもって、外国語習得にチャレンジしてほしいと思います。外国語専門部会では、学生の皆さんや社会のニーズにあった外国語教育が、より効果的にできるよう、教養教育の外国語教育を改革していくつもりです。その手始めとして、今年度は一部の教養英語の授業に習熟度別クラスが導入されます。

## すてきな世界へ旅立とう！

健康・スポーツ科目専門部会長  
加藤敏弘

スポーツの語源には、dis（離れる）+port（港）、すなわち「港から離れていく」という意味があります。スポーツは、陸の上で生きていくために備えなければならない衣・食・住に伴う仕事から離れて、海外旅行へでかけるような気分させてくれる場としての機能を持っています。海外旅行へ出かけるとちょっと不安になったり、何か事件に巻き込まれてワクワクしたりドキドキしたりしますよね。それでも、今まで見たこともないような風景に出会ったり、人のぬくもりを感じたり、そうした体験を経ながら、自分自身を取り戻すきっかけを作ることができたりします。ちょうどスポーツは、そうした旅行と同じような気分を手軽に私たちに提供してくれます。しかも、それは人と人、人と自然、人と道具がダイナミックに関わりを持ちながら進行していきます。

茨城大学では、健康・スポーツ科目の中で、各種スポーツに触れることができます。そこでは、それぞれのスポーツ固有の文化を学びながら、健康的な生活を営むための科学的な知識が得られます。そして自分の身体を見つめ直すことができます。大学という教育機関の活動ですから、そのような学びの場としての機能を果たすのは当然ですが、健康・スポーツ科目は、そうした学びの場の前提として、スポーツや身体活動が本来持っているワクワク感やドキドキ感をみんなと共有しながら、お互いに助け合い、触れ合い、目標に向かって何かをクリエイティブできるような場を大切にしています。

時にはボールに当たって痛い目にあうかもしれません。勝てばうれしいし、負ければ悔しい。いろんなことが次々と起こります。そんな時、次に自分がどのように行動したらよいか、その水先案内をしてくれるのが、茨城大学の有能な講師陣です。一般的には危険だと思われるような活動でも、みなさんを安全にそして快適に導きながら、一人一人が何かを学びとれるように、さまざまな工夫と配慮がなされています。

残念ながら、経年による老朽化によって茨城大学の体育・スポーツ施設は、高等学校までのそれより劣るかもしれませんが、それを凌ぐようなプログラムでみなさんをすてきな世界へご案内します。

## - 情報関連科目の学生アンケートを分析して -

情報関連科目専門部会長

鶴田 浩一

大学教育研究開発センターで実施した情報関連科目の授業（平成13年度前学期）に対するアンケート調査の結果を分析して感じたことを述べてみたい。

まず、最初に「授業を履修して全体としてよかったか」との問いに対しては、概ね80%以上の学生が良かったと答えており、ひとまず安心しました。しかし、情報関連科目の必要性を考慮すると、高い評価が得られるのは当然かもしれません。

次に、「教官の説明の解りやすさ、話し方や板書」に対しては、授業によって評価に大きな差がありました。内容の難易度、授業の形態とも関係するので一概には言えませんが、教官側の反省事項と考えています。

学生がどの程度努力したかの指標である予習、復習は、良くやっている人、全くやらない人等、予想通り広く分布しています。しかし、50%以上の学生が毎回2時間以上予習、復習をしている授業もありました。これは教官の授業の進め方にもよると思われ、ここでも教える側の責任を感じます。また、「授業を理解するため方法」については、「友達と話し合っただけで理解に努めた」が一番多いようです。これは以上に良いことだと思います。

さて、皆さんはシラパスを読んでいますか。シラパスは役に立ちましたか。ここ数年、各教官はかなり力を入れてシラパスを作っています。しかし、アンケートの結果ではあまり読まれていないようです。良く読んでもらえるシラパスとはどのようなシラパスでしょうか。学生諸君の意見をお聞かせ下さい。

授業の「内容に興味を持てたか」、授業を受けて「知識、技能が向上したか」に対しては、多くの学生が「興味を持て」、「知識、技能が向上した」と答えてくれました。興味を持てなかったり、向上しなかったら大変です。

以上をまとめると、学生諸君は情報関連科目に大いに興味があり、また期待が大きいことが分かりました。それだけに、教官の責任もまた大きいことを痛感しました。

人文科目専門部会長

渡邊 邦夫

入学おめでとうございます。人文分野別科目では、人間、文化、歴史のことを勉強します。

自己と別にある「対象」というよりは、わたしたちはどこから来たのか、何を（いかなるすばらしいものを、いかに多様なものを）作り上げることができるか、また、いかに心に関わるか、自分が日頃様々なものに見いだす「意味」とは何だろうか、などの、自己理解の深化がどこかに含まれるような学問の勉強です。授業科目は「哲学」「心理学」「歴史学」「比較文化論」「文学」「言語学」「芸術」「コミュニケーション論」の8つです。人文分野は、単に人間や文化に関わるような学問群として、一律の方法をもっているわけではなく、それぞれの分野において、すぐれた先達が開発してきた独自の学問的方法があります。学問の性格自体が、研究する「現象」の違いに応じて多様になっています。

受験勉強から解放されて、これからがほんとうの学問です。簡単な「正解」はありません。じっくり考え、（自分なりの、そしてあくまでもさしあたりの）答えが出るまでやり続ける、という態度を学んでほしいと思います。まして、人文分野の「勉強」は、勉強といっても、がんらい強制されてやるものではなく、人間（たち）が一定の成長段階に至ればだれでも抱くような、自分や、自分が深く関わる文化そのものや、自分にとっての「他者」「異質なもの」についての、或いは他者と自分を結ぶ諸制度についての、根源的な知的好奇心に基づいています。初めさえ少し我慢すれば、面白くないわけがないと思います。将来技術者になりたいとか自分は理系に徹すると考えている人も、或いは人文分野なんて甘っちょろくてきらいだと感じている人も、騙されたと思って授業の言葉を聞いてみてください。その中には、きっとだれもがいまの年齢で疑問に思うに違いない、自分は何者なのか、ということを考えるための貴重なヒントが、隠されているはずです。技術や自然研究にしても、それを「一生の」課題とするとはどういうことか、という「意味の問い」が答えられなければなりません。どうせだれもがいつかどこかで考えることになるのですから、鍛えられた思考法を、いまのうちに手に入れるのが得策でしょう。

## 板 書 は 重 要 ？ ！

社会科目専門部会長  
齋 藤 典 生

1月末から2月初めにかけて、昨年7月に行われた学生の授業評価アンケート調査の分析に追われた。専門部会長であるがゆえに生じた仕事だったが、学生諸君の授業に向き合う姿勢の一端をうかがうことができ興味深かった。

とくに、自由記入欄には率直な感想を綴ったものが多く、なかには読んでいてドキリとさせられる指摘も含まれていた。私が担当した社会分野のアンケート調査では172人の学生が何らかの意見や感想を寄せてくれたのだが、驚いたのは、板書に関わる記述が38人を数え、最も多かったことである。一人だけ、「黒板にきちんと書いて、字も上手」とプラス評価をしていたが、それ以外はすべて不平・不満の類であった。字が薄い、小さい、字が読めない、字が読みづらいからノートもまとめられない、等々。

学生諸君は、こんなにも板書を重視しているのか！認識不足であった。変わってきているなと感じてはいたものの、念押しされたとの思いが強い。私の場合、学生は、教師の話聞きながら自分の判断で要点をまとめ、自主的にノートにメモすることを前提に授業を組み立てていたから、自ずから板書は走り書きになってしまう。当然の結果だが、私の授業に対しても板書への不満が多く記されていた。「そんなもんなのかなあ、来年度の授業からは板書にもっと気を配らないといけないなあ」、アンケート調査を分析した後の個人的な感想である。

「だが、待てよ」、という気持ちもぬぐいきれない。もちろん全員ではないだろうが、教師が黒板に書いたことをそのままノートに写すだけで満足していいんだらうか？板書に頼りすぎるのは問題ではないのか？教師が板書しようがすまいが、あるいはどんな字で書こうが、聞いている学生が自分の頭で授業内容を咀嚼し、整理し、ノートをとる力を身につけることの方が大事なのではあるまいか？

できるだけ丁寧に板書しようかと思いつつ、他方で、学生諸君にも板書依存からの脱却を求めたい、そんな心境である。

自然科学専門部会長  
井村久則

ご覧になった方も多いと思うが、平成14年1月25日付けの朝日新聞「総合」欄に「科学基礎クイズ何問分かる？」、さらに27日付けの同天声人語にも「大人たちの基礎的な科学知識を×10問で調べたら、日本は14カ国中12位なる記事が掲載された。文部科学省が18から69歳の約2000人に面接調査した結果だそうで、「日本の15歳の科学知識レベルは31カ国中2位と高い」のに「子供より大人の理科離れが心配」、そして「大学教育がだめだからと言う理由だ。だが、…」などと続く。

もちろん、原因が大学教育にあると決めつけられる訳はなく、むしろ、子供の頃からの科学へのあこがれや興味の低下、また急速な社会の変化に教育（改革）が翻弄されているなどの事情によるものと思うが、皆様はどのようにお考えでしょうか。いずれにしても科学の教育レベルを評価する一つの客観的なデータであり、大学の教養教育においても理系、文系を問わずレベルの向上を目指す必要はあると考えている。

本学では教養教育の改革の一環として、13年度から授業アンケートが各クラス単位で実施され、受講生側からの授業の評価や要望、受講生自身の取り組みの様子が統計データとして見られるようになり、自然科学専門部会においても、目下その分析、報告に追われているところである。一側面ではあるが現状の問題点が明らかになり、改革の方向性を決める上で重要な資料になるものと思う。授業アンケートは今年度も引き続き実施されることになっており、改革の進展に資するような正確なデータが得られるよう学生諸君の真摯な取り組みをお願いしたい。

自然科学専門部会のルーチンは、決められたカリキュラムに沿って具体的な授業時間割をコーディネートすることである。例えば、前年度の専門部会で決定された教養教育の基本方針に則り、基本計画案、実施計画案の策定、授業題名、担当教官、開講曜日・時間の調整と続く一連の骨の折れる作業である。13年度は主として巨大クラス問題に取り組み、14年度より地球科学分野で開講本数を増やすことになった。またニュースレターNo.22でも取り上げられているが、懸案であった理学部の専門基礎科目のうち、基礎的な科目を他学部の2年次以上を対象に開講することになった。改革の議論のきっかけと理解している。

## 『天の声 / 地の声』

総合科目専門部会長  
松井宗彦

活気に溢れ創意工夫に満ちた平成13年度の授業が滞りなく終了した。大学教育研究開発センターは点検評価の一環として、学生を対象とした『教養教育に関するアンケート調査』を実施した。これとは別に総合科目専門部会は平成13年度前学期の授業を担当した先生方を対象に『成績評価に関するアンケート調査』を行った。今回は、この二つの調査結果にみる「学生の声と教師の声」をその一部だけ紹介してみたいと思う。教師は学生たちの率直な意見に耳を傾け、学生のみなさんは教師の言い分を親心と受け止めて、相互啓発、大いに研鑽していきたいものである。

[学生の声] ---- 「この授業は推薦できません」「板書が練れてない」「字が汚くて読めない」「声が小さくて何をしゃべっているのか、よくわからなかった」「教えようというやる気が2人とも感じられなかったので、もっとやる気を出してほしい」「シャキッと授業しろ」「さっさと教職やめて二度と教壇にたつな」 ---- など過激な意見も吐露されているが、これ以

上は割愛する（きっと身に覚えのある先生もいらっしゃると思うが）。

[教師の声] ---- 「茨城大学には非常に優秀な学生がいることを知っている」（というお褒めの言葉もあるが）「そうではない学生たちが低い方へ足を引っ張らないでほしい」「学生は興味を持つ者と全く興味を示さない者にわかれる。特に携帯電話に熱中する者、眠り込む者など授業に関心のない者がはっきり見られる」「受講生の教室における学習意欲が専門科目の授業と比べ、低い」「授業に参加する態度が見られない学生が多く見られる」「強い関心を持つ学生もいるが、関心を持たない無思考の学生もいる」「授業の途中でエスケイプするくらいならば、最初から出ない方がよい」「レポート作成という切羽詰まった時がこないと本は手にしない。タバコは買えるのにテキストは買えない」（実はオレもそうなんだ...と自己批判している学生諸君も多いのではないか）。

いずれにせよ、教師の心、学生知らず。学生の心、教師知らず、では進展はない。「天の声と地の声」が共鳴し合って素晴らしいハーモニーとなり、知の世界が広がり躍動することを希望したい（特に若い群像に期待したい）。



# 聞いて欲しい私の意見 1年を過ごして

小林 篤(工学部4年)

受験勉強という名の暗いトンネルをくぐり抜け、待ちに待った夢の大学生活!!「大学ってどんなところだろう?!」と期待して入学した。そして…。

入学して多くの学生が、まず最初に覚えることは、代返の頼み方、一夜漬けのコツ、飲み会の盛り上げ方。肝心の学問については…(^\_^;)。「な~に、どうにかなるサ」と考え、そんなこんなで、もう4年生になってしまった。そういう人が何人いることだろうか?一応、私は学問に対してまじめに取り組んできたつもりだが、結局のところ、私は何を学びに大学へ入学し、大学で何を学んだのだろうか…?

大学1年のころ、私は最初にあまり興味のない教養科目ばかり受けさせられ、専門科目に対する興味もなくなりかけていた。とりあえず、「興味のないことはやらず、興味があることも適当な理屈をこねてやらず、ひとときの娯楽に走る」ことを繰り返した。また、人付き合いに関しても、「相手を理解しなくても、自分のことは理解してもらえる」と考えていたために、「~って俺のこと理解してくれないからムカツク」などと他人の不平不満ばかり言っていた。自分が不平不満を言われているとも知らずに…。

しかし、社会に出たら、娯乐的なやりたいことよりも、精神的、肉体的にも辛いやりたくないことの方が多いだろう。また、相手を理解しようとする思いやりの心がなくては、心の底から信頼できる友人は作れないだろう。私は大学4年目にしようやく、これから長い人生を生き続けるにあたって、今までと同じ生き方ができるはずもないと考えるようになった。

これから私は、「何に興味を持ち、やっていきたいと思っているのか」を再確認し、「自分を理解してもらう前に、相手を理解する気持ち」を持って生きていこうと思う。私は気付くのが遅すぎたかもしれない。しかし、1~3年生の人達はまだ間に合うと思う。充実した大学生活を送るためにも、もう一度「自分」を、「友達」を、そして、生きていく「環境」を見つめ直してほしい。

安田 有希(教育学部1年)

大学では、恒例の如く、試験の前になると学生は試験勉強をするためにバタバタとする。後期の試験がある2月近辺になると、当然のようにそれが起こる。その中で、私は突然この原稿の依頼が…。断ろうと思っていたのだが、題は「聞いて欲しい、私の意見」。これはちょうどいいと思い、今に至っている次第です。現時点では日々私のストレスの原因は、もちろん試験であり、その事で当然頭の中はいっぱいであるので、多少訳の分からない事が書いてあっても、お許し願いたい。

さて、「聞いて欲しい、私の意見」ですが、なぜ、教育棟の改修工事(建てかえ?)が早く行なわれないのだろうかと思います。私が聞いた話では雨漏りのする棟もあるそうです。老朽化が進み、雨漏りがする中で勉強を行うことは非常に辛いと私は思うのです。だから、早急に何か手を打って欲しいと思います。

次に、いろいろな施設のセキュリティーの強化をして欲しいです。最近よく、研究室等が荒らされるのがよく見られます。だから、もう一度、見直して、セキュリティーの強化をして、安全に勉強、研究などに望める環境の提供をしていただきたいと思います。もちろん、私たちも日頃からそういったことに注意を払うことも大事です。ただ時々心配になることが多々あるので、その所はお願いしたいと思います。

最後に教養科目の語学の授業の種類を増やしていただきたいと思います。今は、仏独露西中韓の6種類の言語しか学べないようになっている。私は伊語やマジヤール語などいろいろな言語を学べるようにして欲しい。これはぜひやって欲しいと私は思っている。なぜなら、国際化とい

った面で上記の6か国語では対応しきれないと思うからです。ほぼ必修に近い英語と自分の使いたい言語を学べるようにと思います。

## 国 分 理都子(人文学部1年)

一年が終わった。一年次より多少の新鮮さは失われるものの、再び新しい大学生活が始まるのだ。そこで私が過ごしてきたこの一年間を振り返ってみたいと思う。

そんなに興味のない自然の科目。授業で分からないことがいくつかあり質問しようとしたのだが、忙しそうに荷物をまとめて帰ろうとする先生の姿を見ると、なんとなく迷惑になりそうで声をかけづらい。実際忙しいのだとは思いますが、もう少しゆったりとした態度でいてほしい。私も、そこで諦めず呼びとめるか、研究室に行って質問すればよかったのである。だが、次の時間の授業を受けたり、一晩経ってしまえば質問すること自体をすっかり忘れてしまうのである。そして試験勉強をしている最中に思い出し、他の試験もあるので時間もなく、分からないままの状態です試験を受けることになるのだ。これほど悔しいことはない。

また、前期に受けた授業ノートを振り返ってふと冬頃に疑問を持ったとしても、その先生が非常勤務で大学に来ていた場合、来年の前期まで待つか、その科目の別の先生に聞く意外に方法がない。教養科目では、あらゆる学科の、あらゆる先生がいるため、研究室がどこにあるか探すだけでもなかなか大変だ。だから分からなければ、授業中もしくは授業直後、必ず質問するようにしたいと思う。

さきほど、「興味のない」自然の科目、と書いたが、これは私の過ちである。興味がないのではなく、興味を持とうとしていないのだ。これでは授業を取っている意味がないばかりか、自分が授業を選択している事実が間違っていることになる。大学側が教養として学ぶべきだと判断したこと、この学科・学部を選んだ際学ぶべきこと、この大学に行く際学ぶべきことをまるごと否定することになるのだ。これは自分が選んだことに積極的に働きかけもせず、責任が持てず、放棄した状態だ。興味がないとはそのようなことだ。私はそうならないために多くのことに興味を持って接していきたい。

春休みが明けると二年生になるが、私にはまだまだ反省すべきことが多いようだ。

高橋和美(人文学部2年)

大学に入り、どんな授業をやるのだろうと胸はずませる1年次、最初に受けるのが教養科目です。しかし私が実際に受けてみての感想はというと.....高校の授業とあまり変わらないなと少し拍子ぬけしました。まあ例外もあって、数学の授業などは高校時代に数・Cを学んだにもかかわらず...手も足も出ないといった有様でしたが。

教養の授業はたいがい大きな教室で行われ...多い時は2・3百人が一緒に受けることもあります。集団の心理とでもいいますか、授業を聞いていない学生が多いように思います。事実私もその中の1人でした。たまに先生がマイクを忘れるという事態も起こります。これは不可抗力です。この大人数を律儀にも30分もかけて出席をとる先生もいますが、どう考えても賢いやり方ではないように思うのは私だけでしょうか。指定された教科書が担当の先生が書いた本だったということもありました。これにはちょっとちゃっかりしているなと感心したほどです。

1年の授業のはとんどは教養科目といっても過言ではありません。私は英語が他の科目より少しできたため今の学科に入ることができたというのが本音なのでそんなことはなかったのですが、輝かしい夢と希望を胸に大学に入ってきたという人の中には、先に述べたような現実に矛盾を感じ、大学をやめてしまったり他の大学を受け直すといったこともあるようです。実際に私の知人にもそのような人が2、3人いました。

「学問というのは独学するのが基本だ。教養教育の前提というのは、興味を持つように手助けをしてやることだ」とある先生がいておられました。なかなか的をえていて説得力があります。ここはこの言葉を貸りて終わりにしたいと思います。

渡辺美妃子(理学部2年)

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。新しい生活にドキドキのことでしょう。不安なこともたくさんあると思います。みんな初めはそうですから、慣れるのをまって気楽に毎日を過ごしてくださいね。

大学の授業では、自分の学部の専門的な勉強ができる所だと思っている人も多いと思います。私もそう思っていました。しかし実際1年のうちは、専門的な授業はほんのわずかで、ほとんどが教養科目という基礎的な教養の授業です。期待していただけに、がっかりという人もいると思います。けどこの教養科目は、たくさんの授業の中から、学びたいこと、知識を得たいことを、自分で選ぶことができるのです。これが大学のいいところです。シラパスをバラバラ見ながら、いいと思う授業を見つけるときっとわくわくしてくると思います。自分の専門分野の科目を受講すれば基礎的な勉強ができるし、全く違った分野の科目を受講すれば視野が広がるでしょう。学問に最終的な到達点はありません。ずっと続いていくものです。だから無駄な知識なんて一つもないと思うのです。授業を選ぶときには、先ばいや友達に単位のとやすい授業を教えてもらうのもそれはそれでよいでしょう。だけど私は、やっぱり自分の意志で学びたいと思う授業をとった方がいいかなと思います。何より授業をおもしろいと思える、これはすごく大事なことです！

ほとんど毎日教養科目だけでは、もの足りない気持ちもあるかもしれません。だけど、せっかく色んなことが勉強できるのに、ものにしなければもったいないと思いませんか？どうせならいっぱい吸収してしましましょう。大学生活は多くの人にとって勉強できる最後のチャンスです。今、この時が、将来どんな貴重な時間になるか...たぶんみなさんも色々な人から聞いて知っていると思います。いっぱい遊ぶのもOKです。でも学ぶときはしっかり学んで、「充実している」と言える大学生活を目指して下さい。応援してます！

私が大学に入学して初めて出会った「教養科目」と称される「心理学」「哲学」「社会学」などといった分野は、幼稚園時代は生き物の観察に夢中になり、小・中学校では理科、高校では生物・化学に心を奪われた私にとって触れる機会が少なかった新境地でした。「神とは何か」「真実と虚偽」「常識と非常識」など一筋縄ではいかないであろうテーマの連続であった講義で垣間見る未知の世界観は・驚嘆・懐疑・恐怖の念を抱くことなしには受け入れることができないものでした。1つのテーマに対するあらゆる観念を自分の中でどのように解釈していけばよいのか。何が正しく、何が間違っているのか。各分野専門の先生方の講義とともに、それらを初めて考える機会を与えられたことは、私の大学生活のスタートとして非常に貴重なことであり、専門科目だけでは得られないであろう幅広い視野を養うきっかけの1つとなりました。実際に、私が今後より深く学んでいくわけであろう農学の分野においても、科学的思考だけでなく、倫理的観念に基づく知識や、それに対する理解も求められています。例えば近年注目されており、私たち農学部生にとっても身近な話題の1つである遺伝子工学に対する興味は、研究者のみならず、一般の人々の間にまで広がっています。「クローン技術」をはじめとするあらゆる遺伝子操作は明るい未来を開拓する新技術と称賛される一方で、生命の設計図を人為的に造り変える「神への返逆」と言われ、これらの技術の悪魔性に多くの人々が不安と恐怖を感じました。このような状況において、科学者自身も「神の存在」「生命をそうさすことの罪悪性」について冷静に考えざるを得なくなり、議論の末、実験上の規則を設けるに至りました。しかし、今でもこれらの技術における倫理上の問題に対する論争が絶えることはありません。「教養科目」の意義は人によって様々であると思いますが、このような技術を持つ私たちがポストゲノムの時代をいかに生きるか。この問いに対する無限の解答例を少しだけ示してくれるもの。それが私にとっての教養科目であったように思います。

## 成績の6段階評価の導入と履修単位

教育学郡 山 根 爽 一

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。陽光の下、新鮮な春の息吹を感じるキャンパスの空気はいかがでしょう。私たち 950 名を数える教職員一同、皆さんが茨城大学で勉学やサークル活動を通じて有意義な4年間を過ごせるよう、色々な面からサポートしようと熱意を燃やしています。

ところで、大学における重要な課題のひとつに、学生の成績評価があります。茨城大学では平成12年度からその改革に向けて検討してきましたが、今年度の入学者から成績評価のシステムを変更することになりました。そこで、この誌上を借りて変更の概略を説明し、皆さんにその内容と意義をよく理解していただこうと思います。

成績評価については、各学部の履修要項に詳しく書かれており、評価の区分などが表で示されています。まず、従来4段階（A～Cは合格、Dは不合格）だった成績の評価区分が6段階（A+とA～Dが合格、Eは不合格）に増えるのが大きな変化です。区分の細分は評価の精度向上をねらっています。そして、表には、新たに、各区分の評価の基礎となる修得の内容と程度、さらに、各区分に与えられる評価点（A+に5点、Aに4点、・・・Dに1点）が明示されます。この評価点はグレード・ポイント（GP）と呼ばれ、アメリカなどでは以前から用いられてきました。その平均値（GPA）は、学生の成績の指標の一つとして色々な場面で活用され、諸君にはまだ適用されませんが、一定のGPAを得ることが卒業の要件となることも検討されています。

このような新しいシステムは何を目指しているのでしょうか。そのもっとも根本的なものは、諸君が学んだ成果を客観的かつ適正に評価し、勉学への意欲と成果を高めることです。茨城大学で学んだ諸君が、大きな成果を手にして、胸を張って社会に旅立ってほしいのです。諸君には、従来以上に実のある学業への取り組みが求められますが、このシステムが効果的に働くには、学生だけでなく授業を行う教員の大きな努力も必要です。

私たち教員には、これまで以上に授業の目的を鮮明にし、内容を吟味した上で十分な準備を行い、効果的に授業を行う姿勢が求められます。このような努力があって、初めて諸君に厳しさを求めることができるのです。諸君は、すでに授業の目的や概要、到達目標などを書いたシラパス（授業計画）のぶ厚い冊子を受け取りましたね。これは、諸君が授業を履修するにあたって、教員のもつ授業の意図と受講者に求める到達度などを、書面によって確認するためのものといえます。受講者に授業に関わる適切な情報を提供し、学修成果をどの資料によっていかに評価するのかを示すなど、今年度からシラパスの記述内容にも工夫が加えられました。教員と学生が一体となって、学問の府としての大学の本来のあり方を追究しようというのです。

次に、年間あるいは半期ごとの履修申告単位数に上限を設けることにふれておきましょう。これは、検討中の事項で、平成14年度の入学生にはまだ適用されませんが、上に述べた成績評価の制度と密接な関係をもつので、その基本的な考え方を諸君にも知っておいてほしいのです。

文部科学省の規定によって、大学では45時間の学習に対して1単位が与えられます。茨大で行われている多くの授業は半期で2単位を得られるよう設定されており、例えば、講義の場合、週1回2時間（実際には90分）で15週、つまり30時間の授業で2単位が得られます。これは、一見すると上の規定に反しますが、それなりの仕組みがあるのです。つまり、教室での授業は30時間だが、学生が授業外に図書館や自宅などで60時間の予習・復習を行うことを前提としているのです。これを忠実に実行した場合、1本の授業を受けるたびに4時間の授業外学習が必要で、充実した履修には1日あたり2本程度（週あたり10本程度）が限度ということ

になりますね。これが履修申告の上限設定の理由であり、45 時間 1 単位の規定の実質化（少ない授業を密度高く履修する）によって、各授業の学修成果を飛躍的に向上させようというねらいがこめられています。新システムを効果的に実施するためには、図書館や学習室などを整備して授業外にも学習できる環境を整えたり、学生の履修相談を受けるオフィスアワーの制度を充実させることも強く望まれます。

以上のことを念頭において新学期の授業履修計画を作り、有意義な大学生活をスタートさせてください。

## J A B E E 対応と教養教育

工学部 横山 功一

だれでも、医者にかかるときや家を建てるときには、担当の医師や建築家は実力のある信頼できる専門家であると期待するでしょう。信頼を保證するものとして資格制度があり、それぞれ医師国家試験や一級建築士試験に合格していることが必要になります。資格を与えることに関しては、日本は「実務経験」と「試験」を重視していますが、国によっては、「専門学部系の学部卒業の学歴」を重視するところもあります。

近年、地球規模で市場経済化が進み、国境を越えてボーダーレス化が進行しつつあります。それとともに、技術者の活躍の場も国境を越えて拡がり、商品と技術の国際規格化・標準化とともに、技術者資格の国際的相互認証の動きが進んでいます。さらに、その前提として技術者教育の相互承認が進められています。

このような中で、我が国の工学教育に対しても、「工学者教育プログラムの認証を行うことにより教育の質を高めるとともに、国際的な共通基準に準拠させ、品質保証をする」認定システムの検討が進められています。この目的のために、J A B E E（日本技術者教育認定機構 <http://www.jabee.org/>）が 1999 年に設立されました。最近、幾つかの大学で試行的にこの認定審査を受けていますし、数年後には本格化することとなっています。JABEE 認定は、いろいろな分野が対象になっており、工学部ばかりではなく、理学部、農学部も一部関係しますし、専門教育ばかりでなく教養教育も対象に含まれます。

それではどこがポイントになるのでしょうか？基準 1（学習・教育目標）では、工学基礎及び専門能力に加えて、(a)地球の視点から考える能力とその素養、(b)技術者倫理、(c)社会の要求を解決するためのデザイン能力、(d)コミュニケーション能力、(e)自主的、継続的な学習能力、(f)制約の下で計画的に仕事を進め、まとめる能力、が求められますので、教養教育への係わりが大きいでしょう。また、JABEE 認定では、教育プログラム毎に「その教育が要求基準を満たしているか」について大学側による証明の妥当性を、成果に焦点を当てて審査します。ですから、教官は要求基準を満足するような教育プログラムを用意し、適切に実施し、目標とした成果を挙げるよう努力する必要がありますし、また成果が挙げていることを示すことが求められます。今後卒業証書が、認定基準をクリアし、技術者教育の第一段階を修了した証明になります。従って成績の評価も厳格になりますので、学生諸君もしっかり勉強し、社会に出るための実力を身につけてください。

## - 英語習熟度別クラス構想について -

人文学部コミュニケーション学科

和田 尚明

本学の教養英語は現在 English Communication ( E C ) , Intercultural Communication ( I C ) , Text Reading ( T R ) の 3 種類から学生が好きなタイプの授業を選び、さらに各タイプ用に複数用意されたクラスの中から希望する教官の授業を選ぶことができるシステムになっている。現行のシステムが始まって 6 年が経つが、一定の効果が見られ評価すべき点もあるが、

一方で少なからず無視できない問題も出てきている。とりわけ、大きな問題は3つあるように思える。第1に、各クラスに連動性がないために、学生は週2回の授業をばらばらに受けることになり、1年生で受ける2つの英語の授業内容のレベルや進度が極端に違っていたり、2年生になって受けた授業の方が1年生の時に受けた授業よりも、内容的にやさしくなるといった事態が生じている。2つめとしては、例えば同じ英語のICクラスであっても、評価基準が異なるために、たとえ同じグレード（AならA）を取ったとしても、到達した英語力にかなりの差異が見られるという点が挙げられる。第3点として、基本的には学生の希望に基づくクラス編成になっているので、同一クラス内での学生の習熟度に大きな差異がある場合が多く、そのため効率的な授業運営が難しい場合が多いことが挙げられる。

このような現状を踏まえて、本学の教養英語教育をより満足のゆくものに改善すべく立ち上げようとしているのが、習熟度別クラス構想である。この構想は、教養英語として必要な到達度をきちんと設定し、習熟度別クラスの可能な限り細かく分け、週2回の連動授業を行い、統一されたカリキュラムの下で授業を行い統一された評価基準で単位を出す、ことを柱としている。これにより、現行システムの主な問題点3つを解決することができる。まず、週2回の連動授業を行い、各レベルの習熟度に到達した学生のみが次のレベルへ進むことになるので、第1の問題点は解決される。次に、統一されたカリキュラムに基づいて授業を行い、単位認定に関する評価基準も統一されるので、第2の問題点も解消される。さらに、学年度の初めに統一基準に基づく習熟度別クラス編成を行うために、だいたい同じレベルの学生が1つのクラスに集まることになり、授業運営の効率化が見込まれる。それゆえ、第3の問題点の解消につながる。

ただ、物事は何ごとも机の上の計算通りにはいかず、構想と実践とのずれはつきものである。本構想も、細心の注意を払い、多大な時間を費やして準備してはきたが、実際に導入してみてもはじめて明らかになる問題点もあると思われる。そのために、来年度人文学部社会科学科の1年生を対象にしたパイロット授業（試験的授業）を行う予定である。この結果明るみになるであろう様々な問題点を検討・分析し、適宜修正していくことで、平成15年度以降の本格導入への足掛かりにしたいと考えている。

## 「重要なことは答えることではない，問うことである」

農学部 太田 寛 行

今年度は、毎回、授業の最後の10～15分間で授業に関する質問メモを学生に書かせ提出してもらった（教養科目ではなく、専門科目での話である）。質問メモは、1）授業で理解したこと、考えたこと、2）質問に分けて書いてもらい、質問に対しては、次回の授業で私の答え、考えをプリントして配布した。先日、このような授業を20年間続けている某国立大学教官の著作（森 博嗣著「臨機応答・変問自在」，集英社新書，2001年）を本屋で見つけた。本稿のタイトルは、その本に書かれていた言葉を引用したものである。

質問メモにはいろいろなことが書かれてくる。数回目になると、学生も慣れて安易な質問が目立ち始めた。そこで、疑問を自分で調べるという姿勢を欠く質問者に対しては、逆質問をしてレポート提出を求めた。また、質問メモを介して、学生と討論するような状況も生まれた。一例をあげると、<学生>「細菌の新種を発見したら何かメリットはあるのですか（特許のようなかんじで）？」 <教官>「こんな質問をされた新種の細菌は、問い返すでしょう、『あなたは生きていその物質代謝に対する理解不足の例は環境汚染の問題に現れています。環境汚染は、環境中の微生物の働きの限界を知らなかったために起きた人災と断言できます。～』<学生>「～。私も同感です。『分解者を見つけ処理すればいいではないかという発想が生まれた功罪』というところは、特に、最近考えているところです。～。『本来は、環境に対する意識改革が必要』、本当にそう思います。」

森 博嗣氏の授業では、質問をさせ、その質問の内容で学生を評価しているらしい。問うことを義務づけることで、受け手に「学んでやろう」という積極性を持たせることがねらいのようだ。森氏が説く「問う学生は、口を開けている雛鳥のようなもので、そこに餌を与えるのが教師の役目」に向けて、来年度は質問メモをもう一工夫しようと考えている。



## キャンパス情報 ー各学部からー

### 人文学部から

新入生がキャンパスにあふれる季節がまたやってきた。新入生諸君は、これから始まる大学生活に期待で胸をふくらませていることと思う。

大学は、学問をし、専門的知識や情報、技能などを修得し、さらには自分なりの人生観を深め、人間性を磨く場であると、いえるだろう。あわてることはない、時間はたっぷりある。大いに楽しんで充実した生活を送ってほしい。

さて、大学生にはいくつかのタイプがあるようだ。ひたすら学問、勉強だけをして過ごすタイプ、クラブ・サークル活動に専念するタイプ、もっぱらアルバイトに精を出すタイプ、学問以外の多様な活動に広く浅く取り組むタイプ、何もしないで漫然と過ごすタイプ、等。

君はどのタイプになりそうかな。いずれにしても大学のキャンパス外での活動（アルバイトやボランティアなど）を含めると、大学生が学び、成長し、友達をつくる経路や機会は多様にあるといえそうだ。要は、学生諸君の意欲の問題だろう。

そこで、受験勉強に忙しく追い立てられるように過ごしてきた諸君に、どのような大学生活を送ろうとも、心がけてほしいと思うことをひとつだけあげておきたい。それは、古今東西の古典と呼ばれる書物をじっくりと時間をかけて読むことである。情報化社会の急速な進行の中で、私たちは不必要な、どうでもいいような、また誤ったものを含め情報の洪水の中にさらされるようになった、と言っていいだろう。そこから必要で有用な情報や知識を選り分けて自分のものとするのは必ずしも容易ではない。その点、古典といわれるものは、長い年月にわたり多くの人々に読み継がれてきた、いわば人類の貴重な知的遺産であり、諸君が、今後、専門的知識の体系を学び、人格形成をはかっていく上で大いに有用なエッセンスが濃縮されているものといえる。このような古典に意識的に取り組むことによって諸君の大学生活は一層充実したものになるであろう。

（人文学部 田中重博）

### 教育学部から

この四月から、文部省の「ゆとり教育」が本格化し、公立学校が完全週五日制になるのは皆さんご承知のことと思います。教育学部では、この変化にあわせて様々な準備をしてきました。

たとえば新指導要領で求められている、地域社会と連携して行なう教育活動に対しては、「美術館インターンシップ」という授業を昨年からスタートさせています。茨城県近代美術館の教育普及活動の現場に学生が参加して、学芸員の助手として実際に子供たちと創作活動を行なうのです。土日の休日を美術館で過ごす子供たちのために、どんなプログラムが必要なのかを実地で学ぶことができる貴重な場として、美術館からも、学校からも注目される授業になっています。このタイプの授業としては全国でも早い例だったようで、今年からは埼玉大学教育学部と埼玉県立近代美術館が同様のものを始めるとのことです。

また、新聞報道等で小学校でも初歩的な英語教育が取り入れられようとしているという話を聞いたことがある方も多いでしょう。これは各学校の判断で内容が決められる「総合」という時間のことで、実際に多くの小学校が検討しているようです。確かに中学校になって初めて英語に接するというような時代ではないのですから、当然のことだと思われまます。小学校の先生に求められる英語力とはどのようなものか。教育学部でもそれに対応するカリキュラムの試運転として、今年から一部の学生を対象として、小学校の教師のための英語の授業を開講しました。

「ゆとり教育」では小中学校の授業時間数の減少にともなう学力低下がとりざたされていますが、今まで以上に、少ない授業時間で中身のある授業が展開できる教員を養成しなければいけないのは確かです。今年から、開始される茨城大学の成績評価の精緻化は、この問題に対してもタイムリーな効果を挙げてくれることと期待しています。

(教育学部 小泉 晋弥)

## 理 学 部 か ら

### 「教養科目」は必要である

今年1月発行の本誌22号の特集には、幾人かの学生さんが教養科目についての意見をよせている。かれらの所属学部はそれぞれちがっているものの、それらの意見は基本的に教養科目にたいして懐疑的であることにおいて共通していた。なかにはかなり否定的なものもあった。そのY君の主張するように、教養科目のシステムと内容がおおくの新入生の向学心や勉学意欲をそいでいるならば、大変残念なことである。教養教育にはいくつかの問題があり、現在も検討されているところであるが、ここで教養科目は必要であるという立場から自分の考えをのべ、前号に投稿した学生さんへの返答にしたい。

わたしは、現行の教養科目が2種類の講義の混成になっていることに不評の原因があるとおもう。一つの講義群は、専門の直接的基礎としての科目群であり、これは学部で開講している基礎専門科目と本質はかわらない。この種の科目体系は各学部で企画し、専門科目として開講すればいいことである。情報教育や主たる外国語も専門基礎科目にすればよい。もう一つの講義群は、学問と社会や人生との関係をかんがえる、あるいはそのきっかけとなるような科目群である。本来の意味での「教養科目」である。心の豊かさや人格形成を目指したものともいえよう。各自が勉強しようとしている専門分野にむかう方向を縦向きのカリキュラムとすれば、その位置付けや意味付けをかんがえる横方向のカリキュラムともいえる。全ての面での専門化、細分化のすすんだこの時代に、両方向のバランスのとれたカリキュラムに対する要請は、大学審議会からだけでなく、社会的にも強いものがある。自分の専門分野のみならず専門外の分野をふくめて、それらの社会的意味を中心にあつかう科目を「教養科目」とするべきではなからうか。しからは、この「教養科目」のすべてを1, 2年次に集中することに無理があるとおもう。自分の専門の社会的意義などは、ある程度の専門をまなんではじめて具体的な関心がむくというものだ。

わたしは、1, 2年生には徹底した専門基礎教育をおこない、「教養教育」は1年から3年次後期あたりにわたるのがのぞましいとかがえている。けっして簡単なことではないが、専門基礎科目と「教養科目」を峻別することがまず必要だとおもう。

(理学部 森野 浩)

## 工 学 部 か ら

4月になり、新入生は帝望に胸を膨らまし、在學生は新しい年度の開始を迎え心機一転しているものと考えます。さて、私がこの原稿を書いている今は、2月中旬で、工学部では卒業研究や修士論文の締切ラッシュとなっており、卒業予定者は、まさに、徹夜徹夜の連続といったところです。今年の一年もアツという間に過ぎ去っていった感があります。前期は風のように過ぎていき、すぐに夏休み、秋は知らぬ間に通り越し、年末年始で今日を迎えております。一年、一年を計画的に過ごしていかないと、4年間はすぐに過ぎていきますので新入生の方々も十分に注意してください。特に、最近では就職活動開始の時期が早まり、3年生の後期から活動を始めている学生もいます。卒業はすぐ、目の前にあると考えたほうが良さそうです。

我が大学における教育方法も急速に進化しています。工学部の各学科は JABEE 対応を目指してカリキュラムの改訂を進めている最中です。また、今年から工学部の新入生を対象に、英語のセンター試験点数に準じた英語授業クラス分けも始まりました。特に、工学部の学生には英語を苦手とする人が多くみられます。しかし、グローバル化が進む今日においては、エンジニアにとって英語は世界共通語として必ず必要な道具です。そこで、学生の英語習熟度に応じて大学英語教育を柔軟に対応させ、各個人の英語能力を可能な限り伸ばそうといった考えから、本クラス分けが提案されました。

若い学生諸君の能力開発度は無限大とあって良いので、語学が苦手な諸君も、これを機会にチャレンジしてください。

さて、工学部のキャンパスにも変化が現れています。今年から図書館脇に総合研究棟の新築工事が始まりました。総合研究棟は計算機センター、メディア通信工学科、機械工学科の各研究室が入ることになっている棟で、今年度末には完成予定です。また、今後、老朽化している各学科の建物の改修工事も予定されています。ここ数年は工学部キャンパスのいろいろなところで工事が進みそうです。

大学生活を有意義に過ごすためには一年一年の計を立て、大事にすることが必要不可欠です。新学期が開始されるこの時期、皆で有意義な一年を過ごせるよう、考えていきましょう。

(工学部 増澤 徹)

## 農 学 部 か ら

4月のこの時期の阿見キャンパスは、大学前の桜並木が満開となります。この桜並木の美しさは一見の価値があります。キャンパス内にも古い桜の木があり、毎年、その下で花見の宴が催されます。今年は花冷えの寒さにならないことを祈っております。

ただし、阿見キャンパスの桜は必ずしもいいことづくめではありません。最大の難点は毛虫がたかることです。盛夏のある日、それは起こります。町が消毒用の薬を撒布するや否や、桜並木は毛虫並木へと一変します。一本の桜の木に数え切れないほどの毛虫がぶら下がって降りて来るからです。その桜の木の下は、晴天であっても傘なくしては歩くことはできなくなります。死体は埋まっていなくても、これだけは勘弁してもらいたいと常日頃思っています。でも、いまは桜の花を楽しむことにしましょう。

阿見キャンパスのもう一つのポイントは、研究棟の屋上からの眺望の良さです。霞ヶ浦と筑波山を一望できる眺めは天下一品です。そういえば、もうすぐ釣りの季節ですね。霞ヶ浦は釣りのポイントがいくつもあるようです。

ここで、再び、ただし、です。霞ヶ浦の水質はかなり悪化しているため、夏になるとアオコが大量に発生し、異臭を發します。さすがに阿見キャンパスまでは、その臭いは届かないようですが…。また、最近では飛んでこなくなりましたが、ガガンボのような虫が大量に飛来するののもいつものことです。さらに、環境ホルモンの影響か、体長2m近くの鯉も釣れるという話も聞いたことがあります。

以上が、私がみる阿見キャンパスを取り巻く周辺の偽らざる自然環境です。ただし(三度目となりますが)、こうした自然環境は格好の研究の材料となっていることも事実です。例えば霞ヶ浦研究は農学部を代表する研究として全国に知られています。このように豊富な研究材料に取り囲まれている阿見キャンパスで、新たな研究素材をいっしょに発掘しましょう(なお、この原稿の依頼を受けて執筆しているのは1月末段階のことですので、これから状況は大きく変わる可能性もあることをお断りしておきます)。

(農学部 安藤 光義)

# 掲 示 板 コ ー ナ ー

## 電子掲示板の利用について

平成 13 年度から，共通教育棟において，電子掲示板により，休講・教室の変更・集中講義及び大学の行事等を掲示されておりますが当分の間，学生の呼び出しや試験等については従来どおりの掲示板によりお知らせしますので注意して下さい。

掲示板を見ないことにより，所定の期日までに手続きなどができず，不利な取り扱いを受けることもあります。

登校，下校，授業の合間には従来の掲示板と電子掲示板の両方の掲示に注意して下さい。

## 毎日 3 回は見ましょう

### つ ぶ や き

大学教育研究開発センターの「ローザ・ブルムラ」ニュース・レター第 23 号をお届けします。今，二月中旬，後学期試験も終わり，学生がいなくなったキャンパスは，ときたま教職員が忙しげに行き交うだけで寒々と静まりかえっている。蛻の殻の虚脱感が漂うこんなキャンパスのなかでも，だれが植えたか分からないが，侘助，茶人笠原侘助が愛でたといわれる椿に出くわし，はっとすることがある。似つかわしくない場所で，似つかわしくない花，気をつけて見回すと，そこかしこに侘助，これも，それも，あれはヒメ侘助…… 思いがけない遭遇，地獄で仏…… いずれどこかに，ヒメシャラ，それは季節外れのワルアガキ，それともワルフザケ…… 平成 15 年度教養教育基本方針（原案）が 2 月 28 日に大学教育研究開発センター運営委員会拡大委員会で審議され，3 月に茨城大学教務委員会で正式に決定される。習熟度別英語クラス，習熟度別情報教育クラス，接続授業クラス，成績評価の厳正化等々…… が，てぐすねひいて待ち構えていた大学へ新入生諸君が入ってくことになる。教養教育の改革に専念されてきたセンター長のリーダーシップに感謝するとともに，教養教育の開花と瀕死の大学の再生を祈りたい。

（笹倉）

発行日 平成 14 年 4 月  
発行者 茨城大学 大学教育研究開発センター  
水戸市文京 2 - 1 - 1  
029 ( 228 ) 8416 ( 学生課教養教育係 )